論　説

麻布大学における獣医学教育への取り組み
―きのう，今日，明日―

浅利昌男[†]（麻布大学学長）

1　はじめに

このたび任期満了にて退任された政岡俊夫前学長に代わり，平成26年6月25日付けで浅利昌男が麻布大学学長に就任した．浅利自身は，これまで教育研究畑一筋で現在まで37年間，母校の教壇に立っており，浅学非才の身，これという取り柄もないが，学園の皆さんに支えられながら任期4年の間，母校の発展，日本の獣医学教育の改革・充実のために半歩でも足跡が残せたらという思いで，この重責をお引き受けしたところである．

麻布大学は来年度で創立125周年を迎える．顧みれば本学は今から124年前の明治23年（1890）に與倉東隆（よくらはるたか）によって東京市麻布区に開設された獣医師再教育機関である東京獣医講習所が起源となる．旧学制の最後に麻布獣医畜産専門学校と名称を変えた後，昭和25年（1950）に新学制のもと麻布獣医科大学として，現在の相模原市の旧陸軍兵器学校跡地に生まれ変わり，今の麻布大学に至っている．その間，多くの獣医師を社会に送り出してきた．つまり現在の本学獣医学部獣医学科の歴史は本学の歴史そのものとなる．本学の建学の精神であり，学祖の與倉の言葉による「学理の討究と誠実なる実践」はまさに連綿と続く本学の教育方針である実学主義を標榜したものであり，これが本学の校風として今に受け継がれている．

2　本学に於ける獣医学教育の取り組みと今後の課題

さて，今，獣医学教育は大きな変革の中にある．平成23年3月にとりまとめられた獣医学教育の改善・充実に関する調査研究協力者会議では，我が国の獣医学教育の進むべき道として国際水準に資する教育の実施が必要であることが示され，それについては現在，獣医師養成の学科を持つ国公私立の各校は，これらの提言や施策に基づいて獣医学教育の改革に挑んでいるところである．本学でもそれは例外ではなく，獣医学教育モデルコアカリキュラムに即した教育を平成25年度入学生から実施し，平成28年度に予定している全国統一の共用試験に向けて，教育内容の精査，カリキュラムの変更などその準備を怠りなくやっているところである．また共用試験後の参加型臨床実習の準備や，アドバンス教育についても，その教育内容，具体的な実施方法及び必要な施設整備の検討など，まだこれから解決しなければならない課題を残しつつ，その時期に遅れることなく準備をしなければならない．本学は伝統的に臨床教育重視の立ち位置を取っており，平成11年には高度獣医療を実施する獣医臨床センター（獣医学部附属動物病院，のちに大学附属動物病院）を全国に先駆けて竣工させ，とくに小動物臨床教育の充実を図ってきた．大学附属動物病院では，一般の動物病院で実施が困難な高度獣医療を提供する必要があり，そのために早くからCT/MRI等の診断装置・放射線治療装置等の高度獣医療機器も積極的に導入してきた．また，平成18年には新たに獣医学科所属の研究室のすべてを収容する獣医学部棟をその獣医臨床センターに接続した形で竣工させ，実学重視の具現化を図ってきた．小動物臨床領域はこの間，社会全体のコンパニオンアニマルへの意識と高度獣医療のニーズが高まり，麻布大学附属動物病院でも以前と比べ症例数が増え，業務規模は大幅に拡大した．現在では獣医学科臨床系教員10人のほか，動物病院専任教員6人，特任教員9人を配して小動物臨床実習教育にあたっている．今後も小動物臨床の教育病院として臨床教育に必要な症例数の確保，教育補助スタッフの充実，高度獣医療の実施のための診療スタッフの充実などを図っていかなければならない．また，来るべき参加型臨床実習に対応できる施設についてもさらに整備していかなければならないと考えている．

一方，本学では本年7月に産業動物臨床教育センター（図1，2）を竣工させた．あまり知られていないところだが，本学は首都圏にありながら地理的背後に畜産の盛

† 連絡責任者：浅利昌男（麻布大学）
〒252-5201　相模原市中央区淵野辺1-17-71　☎042-754-7111　FAX 042-754-7661
E-mail : asari@azabu-u.ac.jp

図１　産業動物臨床教育センターの外観

図２　産業動物臨床教育センターの内部

んな相模原市緑区津久井地区が隣接しており，地元の開業獣医師や農業共済の協力を得て，従来からその地域の畜産農家の傷病牛を学内に搬入し，本学キャンパス内で治療し，それらを学生の教育に供する取り組みを行っている．臨床系教員が実施する毎日の実際の治療を学生が補助し，患畜の世話をすることは教室では学べない，現場での体験を通したさまざまな有益なものをここで得ることになる．このたび，本学にこの産業動物臨床教育センターが竣工したことで，牛，馬の臨床実習の拠点が新たに生まれ，一層の教育環境の整備がなされ，産業動物の参加型臨床実習の実施に向けて大きな一歩を踏み出したといえる．

また，ハード面での整備ばかりでなく，今後はソフト面の充実として本学の獣医学教育に預かる獣医学科内の教員の適正配置に取り組んでいきたいと考えている．現在，本学の獣医学科がめざす獣医学教育の将来像を定め，それを見据えて，研究室の統廃合を含めた次世代の教員構成案を策定中である．具体的には，生産獣医学系及び臨床獣医学系の臨床教員の増員が主眼となる．これには「卒業生がどの分野で働く場合においても獣医師としての特性が必要であり，その中で本学としては，臨床教育を充実させたい」との学科の意向が背景になっているが，根本には前述した麻布大学の伝統的な臨床教育重視の考えがある．

3　獣医学科の国際交流

麻布大学では，従来から，グローバルな人材養成を目的に，海外の教育機関との間で学術交流協定を結び，本学と海外の大学間で，学生交流や教員交流が行われている．獣医学科に特化した交流では米国ペンシルヴァニア大学獣医学部と本学獣医学部との間で続いている交流プログラムが歴史も長く，毎年，高年次学生を中心とした10人程度の獣医学科学生が，ペンシルヴァニア大学獣医学部附属教育病院の約２週間の臨床ローテーションに入り，米国での小動物臨床の実際を経験してくる．このプログラムでは同時にペンシルヴァニア大学獣医学部から毎年１名，１週間程度，新進気鋭の教員を招聘し，獣医学科学生及び動物病院研修医を対象に，それぞれの専門領域のレクチャーを実施し，そこで有意義な情報交換を行っている．また今年度の新しい話題としては，この初冬にアジアの獣医学生に目を向けた国際交流が本学で実施される．これは㈱科学技術振興機構（JST）が主催する「日本・アジア青少年サイエンス交流事業（JSTさくらサイエンスプラン2014）」に本学の応募企画が採択されたもので，本学国際化戦略の一環として立案したものである．昨今，家畜疾病や人獣共通感染症等が国境を越えて伝播する機会が多くなっており，疾病の診断実務を知る研究者による国家間情報ネットワーク構築の重要性は高まっている．そこで，我が国を含むアジア諸国の獣医学生の国際感覚を養い，グローバル人材を育成することを目的として，本学では，JSTさくらサイエンスプランにおける科学技術交流活動として，“家畜疾病の最新診断技術”コースを実施する．本コースでは，獣医学科を持つアジア７カ国（中国，インドネシア，タイ，韓国，台湾，フィリピン，マレーシア）のトップランク大学から外国人学生24人（大学院・高年次学生）及び日本人学生６人が共同で日本の先端家畜疾病診断法を実習形式で学びながら，各国の家畜疾病や人獣共通感染症について理解を深める．ウイルス病，細菌病及び寄生虫病を含む家畜感染症の診断技術を，言語，文化，習慣の異なる諸国の学生が一緒に学び，相互理解及び友情を深めることが狙いとなる．本コースで用いる施設・設備は本学獣医学部内のものを利用し，スタッフとして獣医学科の主に感染症の研究に携わる教員９人が参加する予定である．本コースは，従来の大学間の学生国際交流や外国人研修コースとは異なり，日本人学生と外国人学生が共に学び，共に実験を行うことにより，外国人と日本人の相互理解を経験させることが特徴となる．本学獣医学科では将来に向かってもなお，このような取り組みを積極的に進めていきたいと考えている．

4 おわりに

社会では少子化が進み，私学は選ばれる大学として教育研究の実をあげるため，さまざまな改革に取り組まなければならない．また，獣医学教育の国際水準化への改革もまだまだ緒についたばかりである．本学獣医学科は言うまでもなく獣医師養成を目的に設立されている全国16の教育機関の一つだが，その中で，建学の精神の基，麻布大学獣医学部獣医学科としてのアイデンティティーをより鮮明に打ち出せるよう，独自の獣医学教育への取り組みを進めていく所存である．